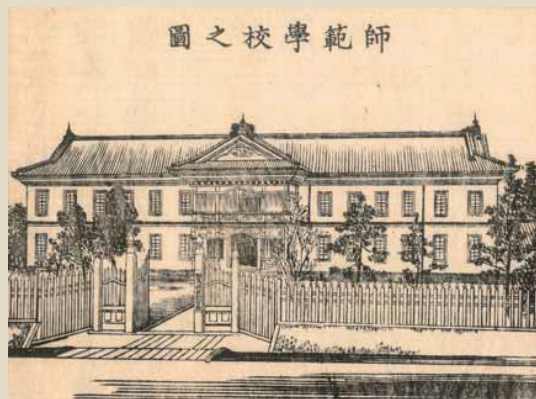


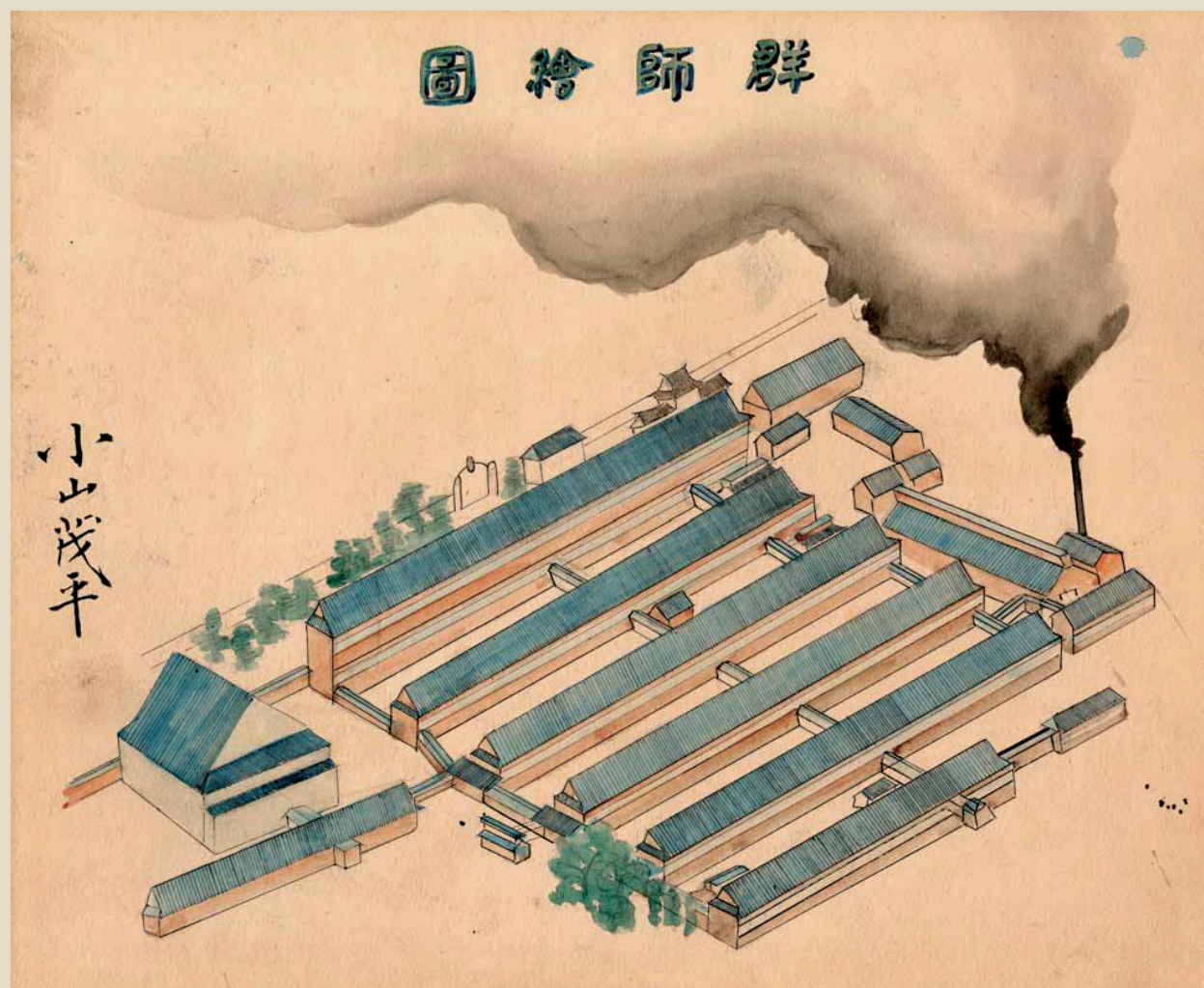
師範学校資料から見る
群馬県師範学校の
移り変り

師範学校之圖



『群馬縣地誌略上』(明治十六年)より

群師繪圖



大正七年度卒業制作



昭和十四年三月卒業記念アルバムより

2007.8.10 科学研究費補助金にて製作 研究課題「群馬県師範学校史料にみる科学教育と群馬県女子師範学校の郷土教育」(19500779)

監修 玉置豊美(元群馬大学非常勤講師／(株)数理設計研究所)

発行 群馬大学総合情報メディアセンター



群馬大学総合情報メディアセンター中央図書館の特殊資料室には、共同教育学部の前身である群馬県師範学校、群馬県女子師範学校から継承された明治期の教科書が約3,000冊、学校事務資料などが3,000点以上保管されている。本稿は、平成13年（2001）からその資料整理にあたった玉置豊美、赤羽明、所澤潤、高橋浩らによる研究論文を元に、同館所蔵資料を通じて群馬県師範学校の移り変わりを追うものである。

図書資料から見る群馬県師範学校の誕生期

図書には、所蔵の遍歴を示すいくつかの朱印が押され、またいくつかのラベルが貼られている。それらは図書の来歴とともに群馬大学の歴史をも示す貴重な記録である。図書の本文最初の頁欄外に押された朱印から、初所蔵を示す印字11種類が識別できた。すなわち、「十七番中學本部学校」、「熊谷縣暢發校」、「群馬縣第五課」、「群馬縣編纂課」、「群馬縣師範黌」、「群馬縣衛生所」、「群馬縣醫學校」、「群馬縣女學校」、「群馬縣師範學校附属小學校」、「群馬縣尋常師範學校附属小學校」及び「群馬県女子師範学校郷土研究室」である。以下に印字が現す組織の歴史的背景を考察する。

「十七番中學本部学校」は、明治5年（1872）頒布の学制による学区制がしかれていた時期の学校の名称で、正確には第一大学区第「十七番中學本部学校」であろう。十七番中学とは第一大学区（現在の群馬県の位置を含む）における十七番目の中学区という意味である。当時の群馬県（第一次群馬県）に教員養成機関として設けられたのは、明治6年2月、前橋に開設の小学教員伝習所であった。第一次群馬県は、明治6年6月から現埼玉県の一部と併合し熊谷県となるが、それにともない前橋の小学教員伝習所は場所を本庄に移され、熊谷県暢發学校と改称される。「熊谷縣暢發校」印は熊谷県暢發学校で用いられていたと考えられる。この時期、「十七番中學本部学校」は、十七番中学区内の小学校を統括する所であり、また教員養成の機関でもあった。熊谷県暢發学校と同時に存在したが、熊谷県暢發学校よりは短期の教員養成機関であったようである。

熊谷県は明治9年（1876）8月までであり、引続き第二次群馬県が設置され、同時に熊谷県暢發学校の後身として群馬県師範学校が誕生する。「群馬縣第五課」は第二次群馬県初期において、群馬県師範学校の経理事務を担当していた課であった。「群馬縣編纂課」も同時期に存在したと思われるが、現在のところ、その名前を含む資料を見出していない。「群馬縣師範黌」は初期の群馬県師範学校において用いられていたと考えられる。

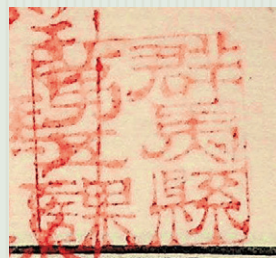
明治7年1月、熊谷県に衛生局が創設された。熊谷県衛生局は明治8年8月に熊谷県衛生所となるが、これが「群馬縣衛生所」の前身である。明治9年5月、熊谷県医学校の開業伺いが出された。やがて明治11年8月、第二次群馬県の初代県令梶取素彦（在任明治9年8月から17年7月）の強い意志のもとに、「群馬縣醫學校」が群馬県庁の側に建設された。しかし経営費用等の困難で「群馬縣醫學校」は明治14年7月には閉じた。「群馬縣女學校」はやはり梶取の意向を反映して、明治15年7月に設けられたが、明治18年の県会ではすでに閉校の決議がされた。実際には寄付等により、明治21年頃まで存続したようである。教員養成機関の附属小學校は熊谷県暢發学校の時代から教員を志願する者の訓練校として存在した。熊谷県暢發学校が群馬県師範学校に改称されるとともに、附属小學校は「群馬縣師範學校附属小學校」と名称変更された。同様に「群馬縣尋常師範學校附属小學校」は、明治19年4月、群馬県師範学校が群馬県尋常師範学校と改称されたことにともなって、「群馬縣師範學校附属小學校」から名称変更されたものである。「群馬県女子師範学校郷土研究室」については後述する。



【写真1】十七番中學本部學校



【写真2】熊谷縣暢發校



【写真3】群馬縣第五課



【写真4】群馬縣編纂課



【写真5】群馬縣師範黌



【写真6】群馬縣衛生所



【写真7】群馬縣醫學校



【写真8】群馬縣女學校



群馬県師範学校教師と教育方針

—物理教師瀧澤菊太郎の影響—

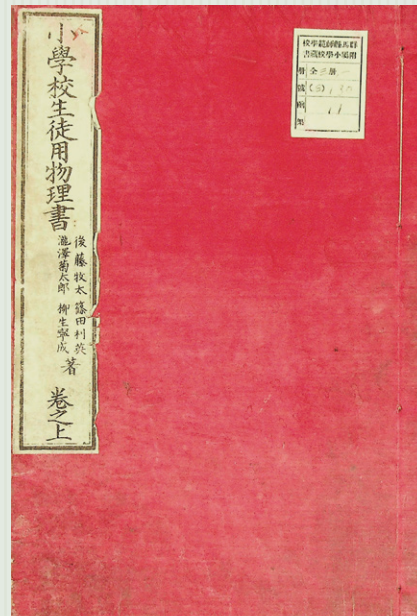


〔写真9〕 明治22年頃の
瀧澤菊太郎

明治10年代20年代の群馬県師範学校の物理教師には、宇田^{うだ}川^{がわ}準^{じゅん}一^{いち}・篠田^{しのだ}利^{とし}英^{ひで}・瀧澤^{たきざわ}菊^{きく}太^{たろう}郎^{りょう}・柳生^{やぎゅう}寧^{やすなり}成^{なり}らが時期を重ねながら存在した。明治18年(1885)発行、後藤^{ごとう}牧^{まき}太^た・篠田^{しのだ}利^{とし}英^{ひで}・瀧澤^{たきざわ}菊^{きく}太^{たろう}郎^{りょう}・柳生^{やぎゅう}寧^{やすなり}成^{なり}著『小学校生徒用物理書』(写真10)は群馬県内の小学校で実験講習などを経て作られたようであり、師範学校と小学校現場との親密な関係がうかがえる。そのような関係性には、明治16年(1883)に群馬県師範学校に赴任し、同22年に同校の校長(明治22年12月-25年9月)になった瀧澤菊太郎の影響が大きかったようにみえる。

瀧澤は教え子を東京の高等師範学校に推薦し、さらに物理化学を学ばせ、卒業後群馬県師範学校の教師として迎えている。小林晋吉(明治25年4月-29年2月)が例である。瀧澤の次の大束重善校長(明治25年9月-32年6月)もまた同様の方針を取り、角田傳(明治29年4月-32年6月)が同様の道を進んだ。角田は大束校長の転出と共に辞す。

角田傳の後には中根鷺三郎・佐藤廉蔵・東辰蔵が3~4年ごとに続く。彼らは群馬県師範学校の卒業生ではない。この間校長も、矢島錦蔵(明治32年-)・堀井覚太郎(明治35年-)・羽田貞義(明治36年-)と変わった。東の次に佐藤宗次(明治43年-)が物理化学の教師となる。彼は広島高等師範学校卒業である。佐藤(宗)の就任期間は長く、辞したあとも群馬県内で中学校長職などに就く。彼は、大正7年(1918)に『実験案内式理化児童実験指針』を著した。



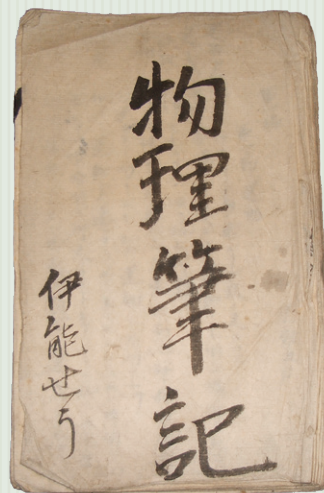
〔写真10〕

『小学校生徒用物理書』

当時の物理・理科教育の第一人者であった後藤^{ごとう}牧^{まき}太^たと、後藤の教え子で群馬県師範学校の教員であった篠田利英・瀧澤菊太郎・柳生寧成の4名が執筆し、明治18年(1885)に出版された物理教科書。身近なものを使った実験を図解で分かりやすく説明し、群馬県師範学校で尊重された、実証的な科学精神に基づく実験重視の物理教育を反映している。明治19年に「物理」「化学」などを「理科」に統一する国の教育方針が打ち出され、全国的に『高等小学理科書』や『小学理科新書』といった教科書が使われるようになって、群馬県ではこの『小学校生徒用物理書』が明治27年頃まで使用されていた。

明治期の小学校物理他の学習帳と見られる筆記が、最近各地で見つかっている。その先鞭をつけたのは、玉置らが群馬県吾妻郡中之条町の歴史民俗資料館(現在、中之条町歴史と民俗の博物館「ミュゼ」)で平成18年(2006)に見つけた伊能^{いぬえ}せう^{せう}氏の「物理筆記」(写真11)であった。その後、多くの筆記が発見されたことから、筆記という学習形式は当時において、一般的であったと考えられる。

ここで伊能氏による「物理筆記」の特徴に着目する。伊能氏は明治9年(1876)生まれであり、『小学校生徒用物理書』は高等小学校の教科書であったことから、同筆記は明治20~21年頃に書かれたものではないかと思われる。また、同筆記の図は『小学校生徒用物理書』の完全な写しであることが明らかになった。写真12は『小学校生徒用物理書』巻の上第29図の印刷図(左側)と伊能氏の図(右側)を並べたものである。伊能氏の図は半透明のパラフィン紙に筆で描かれている。巻の上には39図あるが、そのうちの21図が、同様の方法で描かれている。すなわち、伊能氏は『小学校生徒用物理書』を手元に置いていたことになる。同教科書の、特殊な使用実績である。



〔写真11〕
※中之条町歴史と民俗の
博物館「ミュゼ」所蔵



〔写真12〕

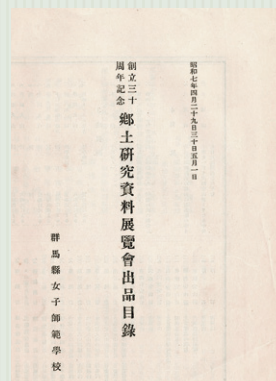
群馬県女子師範学校創立 30 周年記念郷土研究資料展覧会

—野々山源治教諭の功績—

中央図書館所蔵の約3,000(和綴2,000)冊の明治期教科書のうち630(殆ど和綴)冊は「群馬県女子師範学校郷土研究室」印のある、既使用の教科書である。表紙にラベルが貼られ、そこには女子名が記されている。それらは、地歴担当であった野々山源治教諭(写真13)が群馬県女子師範学校創立30周年記念行事(昭和7年4月29日—5月1日)に関係して、昭和6年(1931)に女生徒達に収集させたものだった。『創立三十周年記念郷土研究資料展覧会出品目録』(写真14)には、「群馬県明治初年以後三十七八年に至る小学校教科書」という項目がある。野々山教諭は昭和2年に群馬県女子師範学校に赴任し、昭和9年に夭逝されるまで同校の「郷土研究」に尽力した。



〔写真13〕昭和7年野々山源治教諭(写真右端)
※両角(金古)千鶴子氏提供



〔写真14〕

〔表1 蒐集者たち〕

卒業年	課程	卒業回次	蒐集者数(名)	学年の全生徒数(名)	学年の全生徒に占める蒐集者の割合(%)
昭和7年3月	本科第一部	第27回	6	33	18
同	本科第二部	第18回	4	34	12
同	専攻科	第6回	3	12	25
昭和8年3月	本科第一部	第28回	12	36	33
同	本科第二部	第19回	16	34	47
昭和9年3月	本科第一部	第29回	9	40	23
昭和10年3月	本科第一部	第30回	10	34	29
昭和11年3月	本科第一部	第31回	5	33	15
昭和12年3月	本科第一部	第32回	1	26	4



〔写真15〕昭和8年両角(金古)千鶴子氏
※本人提供

昭和6年を収集年だと導いたのは次のような方法による。蒐集者は67名(学年不明者1名)であった。表1に会員名簿から調べた彼女たちの卒業年を示す。ラベルに氏名と共に学年が示されている生徒が10名ほどいたため、卒業年と学年との比較で収集年を割り出した。結果、表1に見られる卒業年の広がり、ある年の学年の広がり、を示唆していることがわかった。それが昭和6年だった。昭和8年3月本科第二部卒業生に蒐集者の割合が多いのは担当が野々山教諭であったことによると推測する。蒐集冊数は一人数冊から20冊に及ぶものまであった。多くの教科書を蒐集した生徒の一人である両角(金古)千鶴子氏(写真15)は、昭和6年に本科第二部に入学し、昭和8年3月に卒業した。平成14年(2002)の玉置らによる調査において、両角氏はここに掲載した写真を含む多くの写真を提供し、また当時の群馬県女子師範学校の様子を語った。それはオーラルヒストリーとしてまとめられている。

昭和 18 年 官立群馬師範学校への昇格

群馬県師範学校、群馬県女子師範学校は、昭和18年（1943）に官立専門学校と同等の「群馬師範学校」に昇格し、統合した両校はそれぞれ男子部・女子部となった。同時期に前橋医学専門学校（群馬大学医学部の前身）も開校し、官立の専門学校が前橋に2校誕生した。

女子部



〔写真 16〕

～第1回卒業写真 昭和19年3月 本科2年1組（表2㉔）～
昭和14年度群馬県女子師範学校一部入学者である。5年制の最終学年が群馬師範学校に変わった。



〔写真 17〕



〔写真 18〕

～第2回卒業写真 昭和20年3月（左から1組2組 表2㉔F）～
昭和15年度群馬県女子師範学校一部入学者㉔と昭和18年度群馬師範学校1年入学者Fの混成クラスである。

【表2 群馬師範学校女子部の移り変り】

	昭和18年			昭和19年			昭和20年			昭和21年			昭和22年			昭和23年		
本科													3年	3組	㊦DK	3年	2組	IL
														2組	㊦DK		1組	IL
														1組	㊦DK		1組	IL
	2年	3組	㊦	2年	2組	㊦F	2年	3組	㊦H	2年	3組	㊦DK	2年	2組	IL	2年	2組	O2
		2組	㊦		1組	㊦F		2組	㊦H		2組	㊦DK		1組	IL		1組	O1
	1組	㊦	1組	㊦F	1組	㊦H	1組	㊦DK	1組	㊦DK	1年	2組	IL	1年	2組	O2	1年	1組
1年	2組	㊦F	1年	3組	㊦H	1年	3組	㊦DK	1年	2組	IL	1年	2組	O2	1年	1組	MQ	
予科	3年		㊦	3年		㊦	2年		I	2年		M	3年		M	3年		N
	2年		㊦	2年		D	1年		M	1年		N	2年		N	2年		P
	1年		D	1年		I							1年		P			

入学から卒業までの在籍者をアルファベットで示す。昭和20年の本科1年は三種類の入学者の混成クラスである。○は群馬県女子師範学校期の入学者。
㉔：昭14一部入学 ㉔、㉔：昭17二部入学 D：昭18予科1年入学 ㉔：昭15一部入学 F：昭18本科1年入学 ㉔：昭16一部入学 H：昭19本科1年入学
I：昭19予科1年入学 ㉔：昭17一部入学 K：昭20本科1年入学 L：昭21本科1年入学 M：昭20予科1年入学 N：昭21予科1年入学
O：昭22本科1年入学 P：昭22予科1年入学 Q：昭23本科1年入学（少い：11人）



男子部



昭和18年度予科入学者 1 年 1 組

[写真 19]



昭和18年度予科入学者 1 年 2 組

[写真 20]

【表 3 群馬師範学校男子部の移り変り】（表中のアルファベットは、男子部における判別用。表 2（女子部）のアルファベットとは対応しない。）

	昭和 18 年			昭和 19 年			昭和 20 年			昭和 21 年			昭和 22 年			昭和 23 年		
本科										3 年	4 組	D 42	3 年	4 組	H	3 年	4 組	L
											3 組	C 42		3 組	G		3 組	K
											2 組	B 37		2 組	F		2 組	J
											1 組	A 38		1 組	E		1 組	I
	2 年	4 組		2 年	4 組	d	2 年	4 組	D	2 年	4 組	H 44	2 年	4 組	L	2 年	4 組	T
		3 組			3 組	c		3 組	C		3 組	G 43		3 組	K		3 組	S
		2 組			2 組	b		2 組	B		2 組	F 45		2 組	J		2 組	R
		1 組			1 組	a		1 組	A		1 組	E 43		1 組	I		1 組	Q
	1 年	4 組	d	1 年	4 組	D	1 年	4 組	H	1 年	4 組	L 39	1 年	4 組	T	1 年		N
		3 組	c		3 組	C		3 組	G		3 組	K 40		3 組	S			M
		2 組	b		2 組	B		2 組	F		2 組	J 39		2 組	R			
		1 組	a		1 組	A		1 組	E		1 組	I 38		1 組	Q			
予科	3 年	2 組		3 年	2 組		2 年	2 組	h	2 年	2 組	N 40	3 年	2 組	N	3 年	2 組	P
		1 組			1 組			1 組	g		1 組	M 39		1 組	M		1 組	O
	2 年	2 組		2 年	2 組	f	1 年	2 組	N	1 年	2 組	P 41	2 年	2 組	P	2 年	2 組	V
		1 組			1 組	e		1 組	M		1 組	O 41		1 組	O		1 組	U
	1 年	2 組	f	1 年	2 組	h							1 年	2 組	V			
		1 組	e		1 組	g								1 組	U			

男子部の場合、いつ入学した人がいつ卒業したかを調べるのはとても難しい。この時期の入学年を確認できる資料が見つかっていないからである。特例として昭和18年（1943）度群馬師範学校予科入学生による冊子『青春の追憶：学徒勤労動員の記』（昭和58年（1983）発行）から、表中 e、f が明瞭になった。また昭和21年度のみ全校クラス分け名簿があり、これが柱になった。表中の数字は人数を示す。男子部では女子部よりも一年早く昭和21年度から本科3年制に移行している。予科が3年制に戻るのは昭和22年度からで女子部と同時である。女子部では群馬県女子師範学校第一、二部に入学した生徒も「群馬師範学校卒業」としているのに対して、男子部では群馬師範学校に入学したものと群馬県師範学校から在籍していたものとの卒業は区別していたように見える。昭和18年9月、昭和19年9月、昭和20年9月の卒業生は昭和25年発行会員名簿に「本科卒業」とのみ表記されている。この9月卒業に関係したのが旧来の群馬県師範学校第一、二部入学生であったように思われる。男子女子が統合された群馬大学学芸学部会員名簿でも昭和28年発行のものは同様である。昭和35年発行の会員名簿からは、昭和18年9月卒業も「群馬師範学校卒業」と表記されている。





【表4 明治26年～大正15年 群馬県師範学校生徒の誓約書・宣誓書】

明治							大正						
資料番号	事務番号	書別	科	部	入学年	人数	資料番号	事務番号	書別	科	部	入学年	人数
126	一冊	宣誓	本		明治 26	26	118	34	誓約・宣誓	本 N 組	一	大正 2	40
		宣誓	本		27	24	120	35	誓約・宣誓	本 O 組	一	2	39
		宣誓	簡		27	25	119	36	誓約・宣誓	本 N 組	二	2	26
		宣誓	本		28	20	121	37	誓約・宣誓	本 O 組	二	2	28
		宣誓	簡		28	30	122	38	誓約・宣誓	二講	乙	2	31
		宣誓	本		29	23	154	39	誓約・宣誓	本	一	3	O32N31
		宣誓	簡		29	28	155	40	誓約・宣誓	本	二	3	N27O27
		宣誓	本		30	28	152	41	誓約・宣誓	二講	乙	3	21
		宣誓	簡		30	27	166	42	誓約・宣誓	本	一	4	51
173	1	宣誓	本,簡		34	33,36	165	43	誓約・宣誓	本	二	4	38
198	2	宣誓	本,簡		35	44,33	167	44	誓約・宣誓	二講	乙	4	18
204	3	宣誓	本		36	71	186	45	誓約・宣誓	本	一	5	52
226	4	誓約	本 O 組		37	36	188	46	誓約・宣誓	本	二	5	30
225	5	宣誓	本 O 組		37	同	200	47	誓約・宣誓	本	一	6	58
224	6	誓約	本 N 組		37	36	199	48	誓約・宣誓	二講	乙	6	25
223	7	宣誓	本 N 組		37	同	216	49	誓約・宣誓	本	一	7	59
326	8	誓約・宣誓	本		38	42	217	50	誓約・宣誓	本	二	7	30
374	9	誓約・宣誓	本 O 組		39	39	226	51	誓約・宣誓	本	一	8	60
373	10	誓約・宣誓	本 N 組		39	39	242	52	誓約・宣誓	本	二	8	8
441	11	誓約・宣誓	本		40	O39N40		53					
500	12	誓約・宣誓	本	一	41	N38O38	248	54	誓約・宣誓	本	一	9	57
502	13	誓約・宣誓	本	二	41	45	255	55	誓約・宣誓	本甲	一	10	40
565	14	誓約・宣誓	本	一	42	45	296	56	誓約・宣誓	本乙	一	10	40
566	15	誓約・宣誓	本	二	42	40	256	57	誓約・宣誓	本	二	10	29
547	16	誓約・宣誓	一講	乙	42	40	257	58	誓約・宣誓	二講	乙	10	15
609	17	誓約・宣誓	本 N 組	一	43	40	270	59	誓約・宣誓	本	二	11	26
610	18	誓約・宣誓	本 O 組	一	43	40	265	60	誓約・宣誓	本甲	一	11	40
611	19	誓約・宣誓	本	二	43	42	266	続冊	誓約・宣誓	本乙	一	11	37
612	20	誓約・宣誓	一講	乙	43	45	273	61	誓約・宣誓	本	一	12	80
613	21	誓約・宣誓	二講	乙	43	32	275	62	誓約・宣誓	講	二	12	31
644	22	誓約・宣誓	本 N 組	一	44	40	274	63	誓約・宣誓	二講	乙	12	24
645	23	誓約・宣誓	本 O 組	一	44	40	281	64	宣誓	本	一	13	80
646	24	誓約・宣誓	本	二	44	44	282	65	誓約	本	一	13	同
647	25	誓約・宣誓	二講	乙	44	27	283	66	誓約	本	二	13	80
673	26	誓約・宣誓	本	一	45	40	284	67	宣誓	本	二	13	同
674	27	誓約・宣誓	本	二	45	38	297	68	誓約・宣誓	本	一	14	80
672	28	誓約	本	一	45	41	299	69	宣誓	本	一新	14	80
675	29	宣誓	本	一	45	同	300	70	誓約	本	一新	14	同
676	30	誓約	本	二	45	29	298	71	誓約・宣誓	本	二	14	80
677	31	学籍簿	本	二	45	28	316	72	誓約・宣誓	本	一	15	81
678	32	学籍簿	二講	乙	45	21	317	73	誓約・宣誓	本	二	15	80
679	33	誓約・宣誓	二講	乙	45	21	318	74	誓約・宣誓	専攻		15	36

本：本科 簡：簡易科（明治27～35年に2年制として存在）

一講：第一種講習科 二講：第二種講習科

表4は、群馬県師範学校生徒の誓約書・宣誓書をもとにまとめた群馬県師範学校生徒入学の記録である（誓約書は知事宛、宣誓書は校長宛に書かれた。共に在校中に本分を尽すことを誓うものであるが、誓約書の方は加えて給費に対して保証することを約束している）。資料本紙に記された事務番号順に並べた。事務一冊の明治29年（1896）本科入学には、後に講談社を創業した野間清治^{のませいじ}の名前が見える。事務42号の大正4年（1915）本科一部入学には、詩人の東宮七男^{かづお}、事務69号の大正14年本科一部新入学には教育者斎藤喜博^{きはく}の名前がある。事務28～33号は、明治45年に1年だけ存在した群馬県第二師範学校入学生徒の記録である。事務68～70号は大正14年本科一部に2種類あることを示す。68号は従前の4年制入学者を示し、69号の「新」とは新課程5年制を示す。53号の書類がない。これは大正9年本科二部入学者のものと推測できる。昭和以降のものはなく、理由も不明である。





〔写真 21〕 明治末年頃 岡田啓蔵先生による群馬県師範学校全図



〔写真 22〕

表紙最上部の絵は写真21の図右下から左上を見込んだ時のもの。写真22(現存する最古の写真)はその正面バルコニーを背景として
いる。この写真には「明治22年本科生一同」とあり、4年折原佐助・角田傳、3年峰岸米造、2年石原和二郎・根岸福弥などが写っている
はずである。瀧澤菊太郎は最上段(左から4人目)にあり、彼の顔写真(写真9)はここから引用した。



〔写真 23〕 大正5年(1916) 群馬県師範学校職員

※最前列を1列とする

1 列左から 岡田啓蔵(図画) 内田桑太郎(音楽) 橋本寛重(体操・英語) 手塚岸衛(教育) 山本宗太郎(校長) 上山道造(数・物) 平松晃(数・物) 永井廣(教諭) 佐藤宗次(物・化) 高畑浅次郎(歴史)

2 列同順 朝倉貢(訓導) 松村ヨネ(訓導) 早川かひ(訓導) 折原佐助(剣道) 松本喜一(修身・教育) 和歌山春吉(国・漢) 古屋正尋(手工)

3 列同順 豊永猛太郎(書記) 永田四郎(博物) 山田吾郎(国語) 倉林佐市(訓導) 正木時雄(訓導) 今西四郎(英語) 野口米次郎(音楽) 荒木襄治(訓導) 正木時措(書記)

4 列同順 田島保平(訓導) 井上英男(訓導) 田口丁十郎(訓導) 中澤宗彌(訓導) 塚越本二(訓導) 三浦浅一郎(教育・法経) 塩野澄一(訓導) 小林始(訓導) 樋口茂(訓導)

欄外同順 下村義幸(体操) 矢島鐘二(体操) 以上37名

参考文献

1. 玉置豊美, 赤羽明, 高橋浩, 森下貴司, 滝沢俊治, 所澤潤 群馬大学附属図書館所蔵理系明治期教科書 - 和装本 - の考察 その由来と目録 埼玉医科大学医学基礎部門紀要 第10号 p.1-16 (2004)
2. 玉置豊美, 所澤潤, 高橋浩, 赤羽明 明治期群馬県師範学校の物理教育 - 個々の物理教師並びに資料にみる物理教育に対する彼らの考え - 日本物理学会 2020年秋季大会オンライン発表 (2020.9.9) 講演予稿
3. 玉置豊美, 赤羽明, 所澤潤, 高橋浩 伊能せう「物理筆記」の図検証 日本物理学会第69回年次大会 (2014.3.30) 講演予稿
4. 120年前に群馬県で生まれた『小学校生徒用物理書』群馬大学情報誌 GU'DAY vol.2(2005)
5. 玉置豊美 群馬大学附属図書館書庫と特殊資料室に保管されている群馬県女子師範学校郷土研究室蒐集本の背景 群馬大学図書館報 LINE <特集 教科書から見えてくるもの> No.287 pp.6-12 (2002)
6. 所澤潤, 両角千鶴子, 玉置豊美, 高橋浩, 赤羽明, 佐藤久恵, 両角千鶴子オーラルヒストリー 群馬県の一女教師の歩み - 終戦後の体験を中心に - 東京未来大学研究紀要 Vol.12, p.171-182(2017)

師範学校資料から見る 群馬県師範学校の移り変り

令和6年(2024)10月25日発行
監修 玉置豊美(元群馬大学非常勤講師/(株)数理設計研究所)
発行 群馬大学総合情報メディアセンター
〒371-8510 群馬県前橋市荒牧町4-2
電話 027-220-7185
URL <https://www.media.gunma-u.ac.jp/>